

	<p>エッセイ</p> <h1 style="text-align: center;">ヘボン式ローマ字</h1> <p style="text-align: right;">持田 典秋</p>	<p>E-16</p> <p>発行日 2009.6.24.</p>
---	---	---------------------------------------

パスポートにはローマ字で氏名を記さなければならない。その際使われるローマ字は、ヘボン式と呼ばれる。ヘボン式とは、幕末に宣教師として来日したアメリカ人 James Cartis Hepburn が考案したものである。

パスポートに書かれている私の名前は Mochida であるが、ヘボン氏の祖国であるアメリカですら「モシーダ」である。たしかに chief は「チーフ」だが、Chicago は「シカーゴ」である。

なぜ「チ」を「chi」としたのだろうか。

「ch」をタ行の子音「t」と区別したのは「チ」と「ティ」の区別をするためであろうことは理解できる。そして単語の頭にあるときには「chi」が「チ」となる例は多い。しかし、単語の真ん中で「ch」と「i」を一緒にし、「チ」と読ませる例は、調べたことはないがどれほどあるのだろうか。

もちろんイギリスでも「モシーダ」であり、フランスも「モシーダ」であった。ドイツに行くとこれがまた「モヒーダ」となる。それではイタリアではとなると今度は「モキーダ」。(確かにイタリア生まれのピノキオのことを、日本では以前はピノチオと呼んでいた。アウンサン・スーチー女史は、テレビではアウンサン・スー・キーだった。)

名前などの短い単語は、大体 2 番目の母音にアクセントが置かれる。そのため、シーとかカーいうようにその音が伸ばされる。

多様性がどうのこうのという議論があるが、自分の名前の呼び方の多様性というのはいかがなものか？ まったく疲れる。

つまり、世界中を巡ったわけではないが、海外でパスポートに書かれた自分の名前を正確に呼ばれたことはまったくといっていいほどない。日本だけが唯一正しく呼んでくれる例外の国である。

日本語では、特に関東地方では母音の i はほとんど発音されない。音に正確に記述するならば、Motchda ではないだろうかと思ひ、以前、オーストラリアに行ったときオーストラリア人にこのように書いて黙って読んでもらったことがあるが、きちんと「モチダ」と読んでくれた。アクセントも自然に。

基準はヘボン式であっても良いと思うが、もう少し記述の多様性を認めたら、名前の呼び方の方は正確に近づくのではなかろうか。この1例だけを取り上げて囃し立てるつもりはないが、果たしてヘボン式ローマ字に固執していいのだろうか。

幕末から現在に時は移り、日本ではヘボン式ローマ字は汎用化された。しかし、かの『ヘボン』氏といえども、彼の同族の日本で有名なアメリカ人女優が、『ヘボン』と呼ばれず『ヘップバーン』と呼ばれているとは、天国にいてもご存じないに違いない。

旅行中のローマの町を歩きながらふと考えた。